

宗教 NGO の類型化

貧困や自然災害、紛争や難民問題など、国家の枠組みだけでは解決できない地球規模の難題に直面し、国境を越えた市民による協力・支援活動の必要性が叫ばれて久しい。こうした国際社会の動きのなかで、これまで人々の生活に深く関わってきた宗教は、どのような役割を果たすべきなのだろうか。人々の心の救済を志向してきた宗教者として、いまのグローバルな側面を抱える問題群にどのように対応していくべきなのだろうか。

このような問題意識から本連載をすすめるにあたり着目したのが、宗教組織が母体となって誕生し現在も宗教的な価値観や倫理観にもとづいて活動する「宗教 NGO」の動きであった。参考事例として、キリスト教からは、日本の国際協力 NGO の草分け的な存在である日本キリスト教海外医療協力会 (JOCS、1960 年設立) を、そして仏教からは曹洞宗東南アジア難民救済会議を前身にもつシャンティ国際ボランティア会 (SVA、1981 年設立) を取り上げ、それぞれの設立経緯や活動理念、事業内容を概観してきたのである。

ところでアジアボランティアセンターの平田哲氏は、これら宗教 NGO を、その活動形態や設立母体である宗教組織との関わりから、以下のような類型化を試みているので参考にしよう (類型の名称は筆者による)⁽¹⁾。

①教団主体型：一宗教団体が主催して、内部組織内で国際協力活動を推進。

宗教組織が独自に、所属会員、信者とともに募金や援助活動を行う。

②異種教団協働型：一宗教団体が主催するものの、他団体との交流・協力関係を維持。

ある宗教団体が NGO を作ったとしても、一宗教の独立性だけで全てをまかなわない。主体性は保ちつつも、外部からノウハウなどを取り入れて、外部の異なった宗教やイデオロギーの人たちとも共に活動していく。

③宗教理念主体型：一宗教家のリーダーシップによる NGO 活動。

個人の信念としては、自身の宗教理念に基づいて活動するが、活動メンバーをその宗教信者で固めようとはしない。自身の宗教団体からはときに異分子扱いされ、資金援助は得られない場合がある。しかし、かえって一般社会にアピールして多様なネットワークを構築し、多くの支援を得て活発に活動するケースも見られる。

これまでの連載で取り上げた先述の 2 つの宗教 NGO を、「伝統宗教 NGO」とか、教団とはある程度の距離を保ちつつ宗教者の強いリーダーシップによって組織・運営されている「宗教理念主体型」と定義付けできるのではないかと思う。それに対して今回からは、一教団が主催するものの、他団体とも協力関係を維持する「異種教団協働型」の国際協力のかたちとして、新宗教の立正佼成会が取り組む一連の平和運動を紹介していきたい。

「一食を捧げる運動」とは

立正佼成会は 1938 (昭和 13) 年、開祖庭野日敬氏と脇祖

長沼妙俊氏によって創立された在家仏教教団である。会員世帯数は約 147 万世帯、国内に 238 教会、また海外には 21 カ国 65 カ所の拠点を抱える。所依の経典は法華三部経。法華経を基盤とした人格形成と、家庭、社会、国家及び世界の平和境の建設を二大目的としている。「お導き・手どり」という布教活動や、輪になって座り、さまざまな悩みについて語り合う「法座」が特徴的だ。

また、開祖自らが新日本宗教団体連合会 (新宗連) や世界宗教者平和会議 (WCRP) などの設立に積極的に関わるなど、教団をあげて国内外における宗教協力および宗教平和運動を推し進めている。庭野平和財団や「吹奏楽の甲子園」と呼ばれる専門館のほか、医療や教育、出版活動を通じて社会貢献事業に取り組んでいることでも有名であろう。これら多岐にわたる佼成会の平和活動のなかでも、とくに国際支援活動を長く牽引してきたのが、今日まで 30 年以上も続く「一食を捧げる運動」なのである。

「一食を捧げる運動」とは文字通り、食事などの一欲を節して、その費用をさまざまな人道支援や開発援助のためにお布施する社会運動である。月に数回の食費分を「一食平和基金」に献じるのだが、わずかな食事代でも会員が心を合わせると、その額は年間で数億にも達することになる。こうして集まった献金は、国内外の NGO に対する資金助成、他の NGO との合同プロジェクト、そして佼成会が自ら取り組む自主プロジェクトへと役立てられるのである。

この運動のルーツは、実は江戸時代にまでさかのぼるという。未曾有の大飢饉が続いた天保年間に、禪教の教祖、井上正鏡師が、「我れ一飯を捧げて人々の飢えを救わん」と説き、救世救民に尽くしたのが始まりとされている。だが、この運動が改めて再認識されるようになるのは、皮肉にも日本では「飽食の時代」を迎えた 1970 年代に入ってからであった。

1974 年、ベルギー・ルーベンにて開催された「第 2 回世界宗教者平和会議 (WCRP II)」において、先進国による過剰な浪費への批判が高まり、「ライフスタイル」改善に向けての宗教的実践行が模索されるようになった。この流れを受けて、青森に本部のある松緑神道大和山が、「特定の日に一食を捧げ、一欲を節しよう」と教団をあげて運動を開始。その活動趣旨に賛同した佼成会青年部も、1975 年から「節食運動」を始め、「いつでも、どこでも、だれにでも、いつまでもできる菩薩行」として会員のあいだで徐々に浸透していくことになる。そして 1979 年、国際レベルで同運動を実践することが決議された「第 3 回世界宗教者平和会議 (WCRP III)」や、開祖による「国民運動化」への提言を受けて、翌 1980 年からは「一食を捧げる運動」と改称しつつ、さらなる運動の普及・推進に取り組むことになったのである。

次号から、「一食を捧げる運動」を支える活動理念や、その活動の詳細についてさらに学んでいくことにしよう。

[註]

(1) 平田哲「NGO の役割と宗教団体」『NPO・NGO とは何か』中央経済社、2005 年。